
なぜ
キリスト教会は
ヘブル的視点を
失ったのか？

セミナーの内容は
インターネットで
ご覧いただけます
<http://tbf.join.boj.jp>

name _____

なぜキリスト教会はヘブルの視点を失ったのか - 目次 -

イントロダクション なぜヘブルの視点が重要か？

- 1 ほっぺたのたとえ
- 2 イエスとニコデモの会話の例
- 3 このセミナーの3つのアウトライン

キリスト教会はいつ、どのようにして始まったのか？

- 1 ディスベンションとは？
- 2 ベルゼブル論争
- 3 教会のスタート

なぜキリスト教会はヘブルの視点を失ったのか？

- 1 初代教会時代の問題
- 2 紀元70年&135年
- 3 置換神学
- 4 四世紀以降
- 5 現在のキリスト教会

キリスト教会は今後どうすればいいのか？

- 1 妬みを起こさせる（ユダヤ人伝道）
- 2 異邦人伝道
- 3 イスラエルを具体的に祝福する
- 4 正しく聖書を学ぶ

イントロダクション なぜヘブルの視点が必要か？

1 ほっぺたのたとえ

「ほっぺたが落ちそうにうまい！」を英訳しましょう

- ① 「It is as nice as a cheek falls.」
(ほっぺたがおちると同じくらいいいねえ！)
- ② 「It is very delicious. (すごくおいしい!)」

- ①は日本的視点をふまえないで解釈（翻訳）している例です。
- ②は日本的視点をふまえた上で字義通りに解釈（翻訳）している例です。

どちらが正解かは明白です。

聖書はその多くがヘブル人（イスラエル人、ユダヤ人）によって書かれており、ヘブル人読者を想定しています。そのため、ヘブルの視点なくしては、正しい聖書理解、聖書翻訳には行き着きません。

聖書解釈の3大原則は次のものです。

- ①ヘブルの視点で読む ②字義通りに読む ③文脈で読む

とりわけ重要なのがヘブルの視点で読むことです。これがなければ、字義通りに読んでも、文脈で読んでも、間違った解釈をすることになります。

2 イエスとニコデモの会話の例

ヘブルの視点をもって解釈する場合と、ヘブルの視点を持たずに解釈する場合では、これほどに差が生じるということを紹介するために、イエスとニコデモの会話は最高の例です。

ヨハネ3:5

イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができません」

イエス様が、夜中に尋ねて来たニコデモと会話をしている場面です。ニコデモはユダヤ人の律法学者であり、教師であり、議員でもある人です。

イエスさまはここで、神の国に入るためには、「水による誕生」と「御霊による誕生」の2つの誕生が必要だと言っています。この解釈には実に様々なものがあります。いくつかの解釈を紹介しましょう。

【解釈1】

「水」は「神の言葉」のことを象徴的に言っている。つまり、聖霊の導きによって、神の言葉を受け入れる時に、人は新しく生まれ、神の国に入れるということだ。

【解釈2】

「水」は「汚れからの清め」を意味している。つまり、人は罪の悔い改めをもって、聖霊の力によって新しく生まれるのだ。つまり、罪の悔い改めは救いの条件であるということだ。

【解釈3】

「水」は「汚れからの清め」を意味している。人は聖霊の力によって新しく生まれると同時に罪から清められる。そういう人が、天の御国に入れるということだ。

【解釈4】

「水から生まれる」というのは、母の胎内から生まれることを言う。「水」はお腹の中の羊水のことである。人は母の胎内から生まれただけでは神の国に入ることにはできず、聖霊により新しくされた者だけが神の国に入ることができるということだ。

正解は【解釈4】です。ヘブル的には、母の胎内から生まれることを「水から生まれる」というのです。しかし、ヘブル的視点がないために、間違った解釈が後を絶ちません。この箇所は、救いの本質に関わる重要な箇所ですが、ヘブル的視点がないと、こういった本質的なメッセージさえ間違った解釈になってしまいます。

ところが、キリスト教会は、歴史の中でヘブル的視点を失っていきます。現在、多くの教会、多くの指導者が、ヘブル的視点を失ったまま、間違った聖書解釈を、正しい解釈として教えています。

そこで、このセミナーを学ぶ目的を確認しましょう。

3 このセミナーの3つのアウトライン

このセミナーのアウトラインは3つです

- ①キリスト教会はいつ、どのようにして始まったのか？
- ②なぜキリスト教会はヘブル的視点を失ったのか？
- ③キリスト教会は今後どうすればいいのか？

このセミナーを通して、教会の成り立ち、教会の歴史が生み出した問題点、高坂聖書フォーラムが取り組むべき課題を学びましょう！

教会はいつ、どのようにして始まったのか？

教会がいつ始まったかという理解のズレと、ヘブル的視点が失われるという問題は直結しています。そこで、教会がいつ、どのようにして始まったのかを確認しましょう。

1 ディスペンセーションとは？

教会がいつ誕生したかを語るためには、ディスペンセーションという概念の大枠を知る必要があります。

神様が6日間かけて天と地、生物を創造され地球の歴史が始まりました。この歴史は千年王国（メシア的王国）の終わりまで続きます。神様はその歴史を1つのまとまりとして扱わずに、7つに区分して扱われています。

- (1) 無垢の時代
- (2) 良心の時代
- (3) 人間による統治の時代
- (4) 約束の時代
- (5) 律法の時代
- (6) 恵みの時代
- (7) 御国の時代

※特に重要なのは(5)~(7)の時代です。

大切なポイントは、**時代区分が変わると、神様が与えるルールが変わる**ということです。

例を挙げてみましょう。

(1)無垢の時代は、アダムが罪を犯す前の時代のことですが、このとき神様は、アダムに肉食を命じています。

創世記 1:29

神は仰せられた。「見よ。わたしは、全地の上にあって、種を持つすべての草と、種を持って実を結ぶすべての木をあなたがたに与える。それがあなたがたの食物となる。」

この時代は、罪が世に入っていない時代ですので、罪の結果である死もありません。つまり、動物を殺してその肉を食べるといふ肉食は想定されていません。これが無垢の時代のルールです。

しかし、(3)人間による統治の時代は、ノアの方舟（大洪水のさばき）の後の時代のことで、次のようなルールが与えられます。

創世記 9:3

生きて動いているものはみな、あなたがたの食物である。緑の草と同じように、すべてのものをあなたがたに与えた。

時代区分がわからないと、神様のルールには一貫性がないように見えます。しかし、神様は時代を区分し、時代によってルールを変えておられます。なぜルールを変えるかと言えば、人間がルールを守れずに罪を犯すためです。

神様が時代を7つに区分しておられる。これ自体がディスペンセーションではありません。ディスペンセーションという英語は、「分配」「倒置」「神の摂理」などの意味がある言葉です。ギリシャ語では「オイコノミア」という言葉ですが、「オイコス（家）」と「ノモス（法）」という言葉の合成語です。つまり、時代区分という枠（家）の中で与えられる神様の法（ルール）が、ディスペンセーションだということです。

ちなみに、新約聖書で「オイコノミア（オイコノメオー／オイコノモス）」という言葉は「管理」「管理者」として訳されています。（ルカ12:42, 16:1-8 ロマ16:23 1コリ4:1-2, 9:17 ガラ4:2 エペ1:10, 3:2, 3:9 コロ1:25 1テモ1:4 テト1:7 1ペテ4:10）

ディスペンセーションの神学的な定義は次のものです。

「ディスペンセーションとは、神の計画が進展していく過程において出現する、明確に区分可能な神の経綸のことである」

また、「7つのディスペンセーション」は神様が与えて下さる「8つの聖書的契約」と密接な関連があります（このセミナーでは学びません）。

今はどの時代でしょうか？ (6)恵みの時代です。この時代は、使徒2:1で聖霊が使徒たちに下ったあの時から始まり、イエス様が再臨される時まで続く時代です。

教会は、恵みの時代にのみ地上に存在します。そのため、(6)恵みの時代を「教会時代」と呼ぶこともあります。ただし、厳密には以下の式の通り、全くのイコールではありません。

恵みの時代 = 教会時代 + 大患難時代

2 ベルゼブル論争

驚くべきことに、7つの時代区分の中で、元々の計画では入らないはずの時代がありました。それが、(6)恵みの時代、つまり今の時代なのです。

元々の計画は(5)律法の時代の後に、(7)御国の時代（千年王国／メシア的王国）が到来するはずでした。しかし、この計画が崩される事件が起こります。それが「**ベルゼブル論争**」です。

それぞれの時代区分には神様からのルールがありますが、時に神様は、人間がそのルールを守るかどうかのテストをされます。ベルゼブル論争はまさにそのテストの場だったのです。

(5)律法の時代に神様が与えたテストは、大きく分けると2つの内容があります。

- 613の律法をすべて守れるかどうか
- メシアが登場したら、その方を信じれるかどうか

申命記 18:15

あなたの神、主は、あなたのうちから、あなたの同胞の中から、私のようなひとりの預言者をあなたのために起こされる。彼に聞き従わなければならない。

「わたし（モーセ）のようなひとりの預言者」とは、メシアのことです。

ベルゼブル論争というのは、イエス様が登場した時代に生きたユダヤ人指導者たちが、イエスさまをメシアと信じなかった事件のことです。

ベルゼブル論争の場面を見てみましょう。

マタイ12:22

そのとき、悪霊につかれて、目も見えず、口もきけない人が連れて来られた。イエスが彼をいやされたので、その人はものを言い、目も見えるようになった。

この癒しはメシアでなければできない癒しだと考えられていました。イエスさまはこの奇跡を行なうことで、自分がメシアであることを証明したのです。もちろん、これ以前も、多くの奇跡やメッセージを通して、ご自分がメシアであることを示されてきました。

この奇跡を見た群衆が驚いて言っています。

マタイ12:23

群衆はみな驚いて言った。「この人は、ダビデの子なのだろうか。」

ダビデの子という言い方は、ヘブル的にはメシアのことです。群衆はイエスさまが、約束のメシアであると驚いています。しかし指導者たちはそうではありません

マタイ12:24

これを聞いたパリサイ人は言った。「この人は、ただ悪霊どものかしらベルゼブルの力で、悪霊どもを追い出しているだけだ。」

悪霊のかしらベルゼブルというのは、ヘブル的にはサタンのことです。彼らはメシア的奇跡を目の当たりにしながら、イエスさまを悪霊集団の一味だとしました。

そしてこの決定は、ユダヤ議会による公式な決定として扱われるようになります。つまりこの瞬間、イスラエルは国家としてテストに不合格となったということです。

そのために、すぐに来るはずであった(7)御国の時代が先延ばしになります。その間を埋めるために与えられたのが、(6)恵みの時代です。

(6)恵みの時代は、追加された時代ですので、旧約聖書にはこの時代のことが預言されていません。「教会」という言葉さえ出て来ないのです（しかし、(7)御国の時代についてはたくさん預言されています）。

ただしこれは、神様にとっても予期せぬ出来事であったという意味ではありません。神様はイスラエル人たちがイエスさまを認めないことを予めご存知でした。(6)恵みの時代を入れることも、当然計画されていました。ただそれは、人間には明かされていないことだったのです。

旧約時代に明かされておらず、新約時代に入ってから明かされる神の計画を「奥義」と言います。

3 教会のスタート

では、具体的に教会がいつ、どのようにスタートしたのかを確認しましょう。

教会とは「聖霊のバプテスマを受けた人たちの集まり」のことです。

バプテスマというのは一体化という意味があります。つまり、教会とは聖霊と一体化させられた者たちのことです。

よって、教会が始まるためには、聖霊がその人に下る必要があります。今現在は、イエス様をメシアと信じた瞬間、聖霊のバプテスマを受けることができます。しかし、(6)恵みの時代の一番最初は、このルールが適用できません。神様は一人のキーマンをお立てになり、彼が「鍵」を使う時に聖霊が下り教会がスタートするように計画されました。

そのキーマンはペテロです。

ペテロが「鍵」を与えられた場面を確認しましょう

マタイ 16:19

「わたしは、あなたに天の御国のかぎを上げます。何でもあなたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたが地上で解くなら、それは天においても解かれています。」

これは、旧約時代は奥義であった「教会」という言葉を、イエスさまが初めて語られた文脈で言われている言葉です（マタイ16:18）。

イエス様が天に帰った後、ペテロは「鍵」を使って、教会をスタートさせます。まずユダヤ人に対して「鍵」を使い、ユダヤ人教会が誕生します。次に、サマリヤ人に対して「鍵」を使い、最後に異邦人に対して「鍵」を使います。それぞれの場面を確認しましょう。

○イスラエル人に対して

イエス様が天に帰られた後、ペンテコステ（五旬節）の祭りの日に、聖霊が弟子たちに下ります。

使徒 2:1-4

五旬節の日になって、みな（弟子たち）が一つ所に集まっていた。すると突然、天から、激しい風が吹いて来るような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。また、炎のような分かれた舌が現われて、ひとりひとりの上にとどまった。すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話した。

聖霊に満たされたペテロは、大胆にメッセージを語ります（使徒2:14-40）。その結果、3千人のユダヤ人が聖霊のバプテスマを受け、教会の一員に加えられます。ユダヤ人によるエルサレム教会の誕生です。

使徒 2:41

そこで、彼のことばを受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。

○サマリヤ人に対して

サマリヤ人に伝道をしたのはピリポでした。

使徒 8:5

ピリポはサマリヤの町に下って行き、人々にキリストを宣べ伝えた。

使徒 8:12

～ピリポが神の国とイエス・キリストの御名について宣べるのを信じた彼らは、男も女もバプテスマを受けた。

ピリポの伝道の結果、サマリヤ人たちはイエス様を信じ、イエスさまの御名によって水のバプテスマを受けていました。しかし、彼らはまだ聖霊が下っていません。それは、サマリヤ人に対して、ペテロが「鍵」を使っていなかったからです。

サマリヤ人がイエス様を信じたという知らせを聞き、ペテロとヨハネがやってきます。

使徒 8:14-17

さて、エルサレムにいる使徒たちは、サマリヤの人々が神のことばを受け入れたと聞いて、ペテロとヨハネを彼らのところへ遣わした。ふたりは下って行って、人々が聖霊を受けるように祈った。彼らは主イエスの御名によってバプテスマを受けていただけで、聖霊がまだだれにも下っておられなかったからである。ふたりが彼らの上に手を置くと、彼らは聖霊を受けた。

教会はいつ、どのように

ペテロが「鍵」を使った結果、聖霊がサマリア人に下りました。サマリア人教会のスタートの場面です。

○異邦人に対して

異邦人教会も、ペテロが「鍵」を使うことでスタートします。

ローマの百人隊長コルネリオは、家族とともに神を信じ、ユダヤ人を助けていました。

使徒10:1-2

さて、カイザリヤにコルネリオという人がいて、イタリヤ隊という部隊の百人隊長であった。彼は敬虔な人で、全家族とともに神を恐れかしこみ、ユダヤの人々に多くの施しをなし、いつも神に祈りをしていた～

天使の導きで、ペテロが彼のところにやってきます。主の導きに従い彼らに福音を語ると、彼ら（異邦人）に聖霊が下ります。

使徒 10:44-46

ペテロがなおもこれらのことばを話し続けているとき、みことばに耳を傾けていたすべての人々に、聖霊がお下りになった。割礼を受けている信者で、ペテロといっしょに来た人たちは、異邦人にも聖霊の賜物が注がれたので驚いた。彼らが異言を話し、神を賛美するのを聞いたからである。

異邦人教会がこのようにスタートしました。

まとめましょう。教会は、いつどのようにして始まったのでしょうか？

- 教会は聖霊が下った日（使徒2:1）から始まった。
- 教会を始めたのは聖霊であるが、その扉を開いたのはキーマンペテロであった。
- まずユダヤ人教会、そしてサマリア人教会、異邦人教会という順で始まった。

しかし、ヘブル的視点を失っている牧師、指導者たちは、教会の誕生の時期を、使徒2:1とは認めません。教会はアブラハムから始まったとか、アダムから始まったと言うのが彼らの主張です。この理解の違いが生じるのは、ヘブル的視点があるかないか、の違いなのです。

なぜキリスト教会はヘブルの視点を失ったのか？

1 初代教会時代の問題

神様はアブラハムという人物を選び、彼と彼の子孫を、特別な民族としました（創世記17章など）。アブラハムの子孫がイスラエル人／ユダヤ人です。

聖書はユダヤ人とそれ以外の民族（異邦人）をはっきりと区別しています。神様はユダヤ人からメシアを誕生させ、ユダヤ人にまず救いを与え、次が異邦人という順序を決めておられます。これは、ユダヤ人が特別に優れているからという理由ではなく、神のご計画のゆえに、彼らが選ばれたということです。

「ユダヤ人」と「異邦人」の間に立ちはだかる壁が、常に問題の原因です。ユダヤ人は選民意識があるゆえに、異邦人を下の者と見下し、異邦人はメシアを否定したユダヤ人を否定します。

(5)律法の時代は、あきらかにユダヤ人にアドバンテージがあった時代です。この時代、異邦人が救われるためには、ユダヤ教に改宗し、ユダヤ人となる必要がありました。しかしこの関係は、先の者（ユダヤ人）と後の者（異邦人）の本来あるべき関係です。

ところが、ベルゼブル論争があったために、来るはずの(7)御国の時代が先送りされてしまいます。(7)御国の時代は、ユダヤ人が神から与えられた契約の故に、大きな祝福を受ける時代です。しかし、その時代は先送りされ、(6)恵みの時代が到来します。恵みの時代は、異邦人に救いの間口が開かれた時代です。これが「先の者が後になり、後のものが先になる」という状態です。(6)恵みの時代でも、救われるユダヤ人はいますが、それは少数です（残れる者／レムナント）。

さて、聖霊降臨によってスタートした教会ですが、20年も経たないうちに大きな問題が勃発します。

使徒 15:1

さて、ある人々がユダヤから下って来て、兄弟たちに、「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と教えていた。

これは、エルサレム教会のユダヤ人信者が、アンテオケ教会の異邦人信者のところにやってきて、「割礼を受けないと、あなたたちは救われない！」と教えたという話です。

アンテオケ教会は、世界で最初の異邦人教会です。ここに、パウロやバルナバが所属しており、この教会からパウロたちは世界宣教に送られていきます。

ここで、私たちが救われる条件について、おさらいしておきましょう。

I コリント15:1-5

兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私があなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立っている福音です。また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音の**ことばをしっかりと保って**いれば、この福音によって救われるのです。

私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、**私たちの罪のために死なれたこと**、また、**葬られたこと**、また、聖書の示すとおりに、**三日目によみがえられたこと**、また、ケパ（ペテロ）に現われ、それから十二弟子に現われたことです。

私たちは、イエスさまをメシア（救い主）と認める信仰の応答により、神からの一方的な恵みとして救われますが、その内容は次の3つを信じることです。

- ① イエス様が私たちの罪のために死なれた
- ② 墓に葬られた
- ③ 3日目によみがえられた

この3つをまとめて**福音**と言います。私たちが救われる条件は、この福音を信じ、イエス様がそのような方だと受け入れるという一点です。それ以外に救いの条件はありません。あなたは、この救いを受け入れておられますか？

話を戻しましょう。「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われぬ」という教えは、救いの本質、福音の恵みを曲げている異端的教えです。この教えを主張したユダヤ人信者は、次の真理が見えていません。

- ・ 割礼は、(5)律法の時代に守るよう定められた教えであり、(6)恵みの時代に要求されているものではない。
- ・ 割礼は、(5)律法の時代であっても、救いの条件ではない。

これが大問題となり、ユダヤ人信者と、パウロたち指導者らに対立します。その対立を解決するために開かれた会議が紀元50年に行なわれた「エルサレム会議」です（使徒15章）。これは、教会の歴史において非常に重要な会議となります。パウロやペテロら指導者全員の一致した結論として、以下の内容が定められました。

- ・ 異邦人信者は、ユダヤ教の規定（律法）に従わなくても良い。
- ・ ただし、偶像に供えた物と、血と、絞め殺した物と、不品行は避けるように。

これにより、表面的には問題解決しましたが、ユダヤ人と異邦人の間にある見えない壁は、すぐに次の問題を引き起こします。

2 紀元70年 & 135年

当時のイスラエルは、ローマ帝国の支配下にありました。しかしローマ帝国は、イスラエルを完全な属国とはせず、ある程度の自治を認めていました。だからといって、選民意識の強いユダヤ人が反ローマ感情を抱かないわけではありません。

紀元66年、ローマ皇帝ネロの時代に、第一次ユダヤ戦争が勃発します。引き金となったのは、当時の総督がエルサレム神殿の宝を持ち出したことが原因です。ユダヤ人のフラストレーションが一気にローマに向かって爆発します。しかし勝てるはずも無く、70年にエルサレムは陥落。神殿も焼かれてしまいます。

これにより、エルサレム教会の信者は散らされて行きます。ただし、イエスさまの預言により、ユダヤ人信者は全員が逃げ、犠牲者は出ませんでした（ルカ21:2-24）。

陥落したエルサレムには、再びユダヤ人が住むようになります。その後、紀元130年に、ローマ皇帝ハドリアヌスが、エルサレムを視察。60年経っても戦争の傷跡が残っている土地をみてあわれに思ったのか、エルサレムの町と、神殿を建て直すことに決めます。

ところがハドリアヌスは、「エルサレム（エル/神 シャローム/平和）」という名前を「アエリア・カピトリナ（アエリア/皇帝の家名 カピトリナ/ユピテル様の住む丘）」という名にするといい、神殿にはユピテル様をまつると明言します。その後、ユダヤ人に割礼禁止令を出します。

これを、ユダヤ人が黙っているはずがありません。この時に、「俺がメシアだ！」と立ち上がった人物がいます。「バル・コクバ（星の子）」という名の男です。イエス様をメシアと認めていないユダヤ人が皆、彼が約束のメシアだと認めたのです。有名なラビであったラビ・アキバがバル・コクバを支持したことが大きな要因となり、**サンヘドリン議会在彼をメシアと認めたのです！**

メシアの到来に勢いづいたイスラエルはローマにのろしをあげます。そして、不意打ちを食らったローマから自治を回復するのです。これが132年に勃発した**バル・コクバの乱（第二次ユダヤ戦争）**です。

しかし、イスラエルの自治は2年ほどで終わり、135年再びエルサレム陥落。生き残りのユダヤ人は全員国外追放されます。皇帝は、この地域にユダヤ人を入れてはならないというおふれを出し、この地を「パレスチナ」と改名しました。

ユダヤ人信者の集まるエルサレム教会も、イスラエルという国も、この時に表舞台から姿を消します。ホーナー博士は、この時のことを語っています。

その結果、エルサレムの母教会は完全に散らされ、屈辱を味わった。彼らはイスラエルの国民的悲哀と裁きとに直面せざるを得なかった。一方アレキサンドリア、カイザリヤ、エベソ、ローマなど主な異邦人キリスト教会はますます繁栄していった。こうして、衰弱しつつあるユダヤ人という長兄をさしおいて、遠国から帰還して和解を受けた異邦人の放蕩息子らが、権力をふるうようになっていった。

バル・コクバの乱の頃には、異邦人が教会の多数派になり、反ユダヤ的傾向が見られるようになります。ユダヤ人はイエス様を拒否した民族だ。その裁きの結果、散らされ、国を追われた。そういった理解、彼らに対する敵対意識が、反ユダヤ主義を生み出していったのです。

3 置換神学

教会が反ユダヤ主義化すれば、当然ヘブルの視点が失われます。ヘブルの視点が失われると、正しい聖書解釈が失われて行きます。すると指導者たちは、自分たちの都合のよい解釈を試みるようになります。次第に、ヘブルの視点、字義通りの解釈の原則が失われ、聖書は象徴的に解釈するほうが「靈的」な読み方だという考えが広まります。なぜなら、字義通りに読むということは、どうしてもユダヤ人が選民であると認めざるを得なくなるため、彼らには都合が悪いからです。

その結果、聖書を象徴的に読む神学「置換神学／契約神学」が誕生します。これは、「イスラエル」に与えられた言葉や約束は、「教会」に受け継がれた（置き換えられた）と考える神学です。

思い出してみましょう

教会はいつ誕生しましたか？
教会をスタートさせるキーマンは誰でしたか？

改めて、ペテロが「鍵」をいただいた場面を確認しましょう。

マタイ16:19

わたしは、あなたに**天の御国のかぎを上げます**。何でもあなたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたが地上で解くなら、それは天においても解かれています。

「天の御国（＝神の国）」という言葉は、それだけでセミナーのテーマになる言葉ですので、今日は詳しく語りませんが、「天の御国」とは「神の支配のおよぶ王国」のことです。この言葉は5つの神の支配のおよぶ王国を指し示している可能性があり、文脈によって、5つのうちのどの王国のことかを判断する必要があります。この箇所「天の御国」というのは「奥義としての王国」を指しており、これは教会のことなのです。

つまり、ヘブルの視点で、字義通りこの箇所を読めば、

天の御国のかぎ = 教会を開く鍵

となります。しかし置換神学に立つと、全く違った解釈になるのです。ハイデルベルク信仰問答には、次のように記されています。

※ハイデルベルク信仰問答は、1663年に、ドイツのハイデルベルクという町でカルヴァン派の人々の手で作られたものです。

第83問 問：鍵の務めとは何ですか。
答：聖なる福音の説教とキリスト教的戒規のことです。これら二つによって、天国は信仰者たちには開かれ、不信仰者たちには閉ざされるのです

「鍵」というのはペテロのもらったあの鍵のことです。置換神学に立つと、あの鍵は、**福音の説教と教会戒規**のことだと解釈します。

これは、教会が神様からすごい権威をもらったという解釈です。牧師の語る福音のメッセージは、神の権威を受けて語られる神のメッセージだと解釈しています。また、教会が定めたルール（戒規）は、神が定めたルールであると解釈します。つまり、教会が神から特別な権威を受けたという考え方です。

教会内で、大きな罪を犯した信徒が出た場合に、教会はこの権威を行使して、信徒に罰を与えます（聖餐式に出られなくなる。教会から除名される等）。神から与えられた「鍵」を使って定めたルールをやぶった者を、「鍵」を使ってさばくということです。

また牧師のメッセージは神からのメッセージですから、牧師が説教の中で冗談を言うことはゆるされません。神の言葉を語るのだから、自分のことは当然語らないし、「おはようございます」の挨拶さえしないという考え方もあります。

これが置換神学に立つ人々の聖書解釈の一例です。ヘブル的視点が失われたことで、聖書の本質が見失われ、神様が求めておられない教えを語り、信徒を縛り、さばきを実行しているのです。

「教会がいつ始まったかという理解のズレと、ヘブル的視点が失われるという問題は直結しています」と既に語りました。キーマンペテロがもらった「鍵」に対して、そのような解釈をしていますから、教会スタートの理解も当然ずれてきます。先ほどのホーナー博士は、こうも語ります。

次第に旧約聖書の歴史を、教会の歴史として読み直すようになり、クリスチャンの歴史はユダヤ人の歴史よりもさらに古いものと見なされるようになった。教会はシナイ山（(5)律法の時代）やアブラハム（(4)約束の時代）から始まったのではなく、創造の日（(1)無垢の時代）から始まった、というわけである。

つまり、置換神学に立つと、先ほどから学んでいるディスペンセーションの枠組みが、全く見えて来ないという結果になります。彼らはこの時代区分が見えないために、たとえば、(5)律法の時代のルールを現在に持ち込み「神の教え」として信徒教育をするのです。

さらにホーナー博士は続けます。

そして年月を経るうちに、「イスラエル」は最終的に「教会」と置き換えられたと信じられるようになった。この教えはますます強調されるようになり、エペソの殉教者ユスティノスが紀元160年に著した『トリフォンとの対話』でその頂点に達した。

つまり、2世紀には置換神学の枠組みが出来上がっていたということです。これを確定的な神学にした人物は、オリゲネス（182?-251）とアウグスティヌス（354-430）です。オリゲネスは、旧約聖書の歴史の部分は比喩的に解釈する方が霊的だとし、アウグスティヌスは、旧約聖書の預言の部分は象徴的な解釈をするのが正しいと説きました。彼は、黙示録20章の「千年」は文字通りではないとし、無千年王国説を立てた人物です。ユダヤ人の最終的な救いについても象徴的に解釈をし、神が救われる人々を教会に導くことだと解釈しました。

このようにして、置換神学が確立し、教会はヘブル的視点を失ってしまいました。そして、ユダヤ人と異邦人の決定的な対立が4世紀頃からはじまります。

4 四世紀以降

聖霊が下ったのと同時にスタートした教会、そして (6)恵みの時代。この時代は「先の者」「後の者」が入れ替わる時代です。その言葉の通りに、初代教会はユダヤ人からスタートし、ユダヤ人により広められましたが、異邦人信者がどんどんと増えて行き、ユダヤ人信者は衰退していきます。

イスラエルがローマから苦しめられている時代も、どんどんと異邦人信者は増え続け、四世紀になると、ローマ皇帝はキリスト教を国教にするために動きはじめます。

313年、ローマの皇帝コンスタンティヌス1世とリキニウスが、**ミラノ勅令**を出します。これは「信教の自由」がうたわれた勅令です。これにより、全ての宗教が認められますが、皇帝はキリスト教を国の統治に利用したいという下心があります。しかし、反キリスト教者や異教徒の反感を考慮し、宗教活動全般を容認するのです。

同時にコンスタンティヌス帝は、反ユダヤ主義のキリスト教を強く打ち出し、土曜日安息日の制度を、キリストの復活した日曜日に置き換えました。321年には日曜日強制休業令を出しています。

その後364年に、ラオディキア教会会議により、日曜日の安息日化が正式に決定しました。現在も、「日曜こそが主日（聖日）」「日曜礼拝以外は認めない」という教えが根強いですが、そのルーツはここにあります。**聖書は日曜日のみが礼拝の日だとは教えていません！**

そしてついに、380年、キリスト教はローマ国教となるのです。反ユダヤ主義のキリスト教が完成したとも言える時です。

また四世紀は、教会によるユダヤ人迫害の歴史の始まりでもあります。ミラノの司教アンブロシウスは「シナゴーク（ユダヤ人会堂）は、神が責められた不信仰の家だ。罪の冷蔵庫だ！」と言い、シナゴークを焼き払うことに賛成し協力をしました。

同じ時代のヨハネス・クリソストモスという祭司は、「ユダヤ人は淫乱で強欲の、キリスト殺しだ。悪魔礼拝をし、宗教そのものが病だ。彼らには免罪も恩赦もない。クリスチャンは復讐をやめてはならない。ユダヤ人を憎悪することはクリスチャンの務めである」と言いました。

四世紀に開かれたニカイヤ公会議では、「ユダヤ教からキリスト教を分離する初代教会の取り組みを継続し、これ以降われわれは、この醜悪な民となんの共通点も持たないようにしよう」と決議されました。

そして、時代が進んで10世紀にもなると、教会は神の名によってユダヤ人を迫害し殺害するようになります。

10世紀の第1次十字軍の攻撃では、フランスとドイツにいたユダヤ人の1/4~1/3が殺害されます。またエルサレムでも数万人が殺され、奴隷として売られた人も大勢いました。

14世紀に入ると、迫害を恐れたスペイン在住のユダヤ人たちが、次々とカトリックのクリスチャンとして改宗します。彼らのことをコンベルソと言いますが、20万人いたユダヤ人のうち、3万5千人が改宗したと言われます。

ただ、コンベルソの中には、表向きにはクリスチャンになっても、中身はユダヤ教徒の人々も大勢いたようです。その人々をコンベルソと区別してマラノと呼びます。カトリック教会は、マラノを見つけ出すと、拷問をし、生きたまま火あぶりの刑に処します。これは教会が公に行なっていたことなのです。15世紀から19世紀にかけて、3万人のマラノが火あぶりにされたと、ミカエル・ブラウン博士は語っています。

そして16世紀、宗教改革が起こります。しかし、反ユダヤ主義に変わりはありません。宗教改革の立役者になったマルティン・ルターは、次のように書いています。

ユダヤ人は卑しく、背徳的な民である。神の民等ではない。糞まみれ。豚のよう。売春婦。シナゴークは燃やせ。ユダヤ人の学校に火をつけろ。彼らにいかなるあわれみもかけるな。彼らを狂犬のように駆除しなければならない

ルターは、「行ないではなく恵みにより救われるのだ」という信仰義認を訴えた人です。

20世紀に入ると、ナチスドイツはルターの言葉に従う形で、ユダヤ人600万人を虐殺します。第二次世界大戦中に行なわれた**ホロコースト**です。当時のプロテスタントの牧師の多くがこれを支持していたそうです。

5 現在のキリスト教会

反ユダヤ主義になり、ヘブルの視点を失った教会が、ユダヤ人を迫害し、殺害し、そのことに協力してきました。その事実を、現在の多くのキリスト教会は語ろうとしません。

そして現在、多くのキリスト教会は、ユダヤ人に対して無関心です。イスラエルは教会と置き換わった。イスラエルを語る意味はなくなった、ということでしょうか。

多くの信徒たちは、自分や、自分の所属する教会が反ユダヤ主義なのかどうかさえもわかっていません。そして、置換神学を唯一正しい神学として理解していることでしょう。

しかし現在、新しい動きが始まっていることも事実です。大きな転換となったのが、**1948年のイスラエル建国**です。紀元70年そして135年のエルサレム陥落以来、ユダヤ人は祖国を失い離散しました。それから1900年ほどの時を経て、イスラエルが再び国として建てられたのです。しかもユダヤ人たちは、そのアイデンティティーを失っていませんでした。これは驚くべき神様の奇跡です！

イスラエルという国が再建した後、文字通り聖書を読まなければ筋が通らないことが、あきらかにされつつあります。そして、日本ではあまり報道されませんが、今、イスラエル人たちは祖国に戻りつつあります。これは (7)御国の時代が近づいている一つの現れでもあるのです。

キリスト教会は今後どうすればいいのか？

なぜキリスト教会がヘブルの視点を失ったか？ おわかりになりましたか？
最後に、キリスト教会は今後どうすればいいのかを考えてみましょう。

1 妬みを起こさせる（ユダヤ人伝道）

ローマ 11:11

では、尋ねましょう。彼ら（イスラエル人）がつかずいたのは倒れるためなの
でしょうか。絶対にそんなことはありません。かえって、彼らの違反によって、
救いが異邦人に及んだのです。それは、イスラエルにねたみを起こさせるため
です。

「彼らがかつかずいた」というのは、ベルゼブル論争のことです。その結果、(5)律法の時代
の後に来るはずだった (7)御国の時代が先送りされ、そこに (6)恵みの時代が挿入されまし
た。この時代は、救いが異邦人に開かれた時代です。つまり「イスラエル人の違反によっ
て、救いが異邦人に及んだ」という言葉はぴったり当てはまりますね。

パウロは、先に救いをいただいた異邦人の役割は、イスラエルにねたみを起こさせること
だと言っています。

アーノルド・フルクテンバウム博士はこう言っています。

「異邦人は歴史の中で、ユダヤ人に妬みよりも怒りを起こさせる罪を犯して来
た。ねたみを起こさせる（パラゼーロー）というギリシャ語の表現は、「誰か
の横に行き、ねたみを沸き立たせる」という意味がある。異邦人信者がユダヤ
人未信者の近くに行き、そのユダヤ人に異邦人信者が持っているものをねたま
せ、そしてメシアを信じさせるためである」

「ねたみ」とは、嫉妬（ジェラシー）のことです。「恨み」とか「怒り」とはまた違う感
情です。

私たちがユダヤ人に妬みを起こさせるためには、彼らの友になることが大前提です。その
上で、元々ユダヤ人のものであった聖書を信じ、それに信頼し、祝福を受け、喜びの人生
を送っていれば、彼らは私たちに対してねたみを持つことでしょう。

しかし、キリスト教会は彼らの友になるどころか、彼らを教会から排除し、この世からも
排除してきた歴史を持っています。私たちの聖書には、ロマ11:11が入っていないのでしょ
うか？

教会がこれを実践していたら、歴史は変わっていたでしょう。教会の指導者たちが、ユダ
ヤ人を愛し、彼らをリスペクトし、彼らから教えを受けていたら、十字軍やホロコースト
などのユダヤ人虐殺は起こらなかったはずですよ。

私たちは、過去の罪を悔い改め、ユダヤ人の友とならなければいけません。もちろん、具体的にイスラエルに住んでユダヤ人の友になることは難しいかもしれません。しかし、キリスト教会の一員として、私たちはユダヤ人のために、何かしらの行動を起こすべきです。

現在メシアニックジューの数は、イスラエル人口の1%ほどだと言われています。日本と同様に、信者の数は僅かです。日本と違うところは、彼らが信仰を持つ時に被る迫害や犠牲の大きさです。フルクテンバウム先生は、メシアニックジューになることと引き換えに、父親に勘当され、二度と会うことはありませんでした。

しかし、数少ないメシアニックジューの多くは、**異邦人の友人から福音を聞いたために救われた**と証言しているのです。

ねたみを引き起こさせる前提は愛です。愛とは、相手をよく知ることです。まずはユダヤ人を知り、彼らを愛するところからはじめましょう。そして、彼らにねたみを起こさせるのは、ユダヤ人伝道の入口となります。

2 異邦人伝道

ユダヤ人を愛し、ユダヤ人に伝道すると同時に、私たちキリスト教会が担うべき大きな役割は、異邦人伝道です。

(7)御国の時代は、先送りにされましたが必ず訪れます。この時代は、ユダヤ人に約束されている霊的祝福が全て与えられることとなります。そして私たち異邦人も、そのイスラエル人が受ける霊的祝福の恵みにつなげていただくことができます（そのことがロマ11章に記されています）。

以下の3つのポイントは重要です

- ① (7)御国の時代は、イエスさまの再臨によってスタートします。
- ② イエスさまの再臨の条件は、その時代のユダヤ人が全員救われ、イエスさまを呼び求めることです（マタイ23:39）
- ③ ユダヤ人が全員救われる前提は、異邦人の救いが完成することです。

ロマ 11:25-26

兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思うことがないようにするためです。その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、こうして、イスラエルはみな救われる、ということです。

パウロは、「イスラエルの一部がかたくなになっているのは、異邦人の完成の時までだ」と語ります。つまり、異邦人の完成の時が来ると、イスラエルの民族的救いが起こり、イエス様が再臨され、(7)御国の時代が到来するということです。

異邦人の完成とは、神様が選ばれた異邦人の救われる魂が、全て救われた時のことです。

私たちが家族や友人に伝道する目的は、もちろんその人の救いを願ってのことですが、同時に、神様の計画の実現、つまり(7)御国の時代の到来を少しでも早めるために行なうものでもあるのです。

教会は神の計画を正しく展望し、与えられている役割を担うことが求められています。

3 イスラエルを具体的に祝福する

神様がアブラハムに与えた「アブラハム契約」の一部を紹介します。

創世記 12:3

あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。
地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」

このアブラハム契約の条項は、無条件契約のため現在も有効です。私たちがユダヤ人を祝福する時に、私たちはアブラハム契約の故に、祝福を受けます。これは神が与えられたシステムです。

パウロは異邦人伝道に召された使徒でしたが、常にこの原則に立っています。パウロはどの町に行っても、まずユダヤ教の会堂に訪れ、ユダヤ人に伝道をするところからスタートしています。ユダヤ人を祝福しているのです。

そのパウロはこう語っています

ロマ 15:25-27

ですが、今は、聖徒たちに奉仕するためにエルサレムへ行こうとしています。それは、マケドニアとアカヤでは、喜んでエルサレムの聖徒たちの中の貧しい人たちのために献金することにしたからです。彼らは確かに喜んでそれをしたのですが、同時にまた、その人々に対してはその義務があるのです。異邦人は霊的なことでは、その人々からもらいものをしたのですから、物質的な物をもって彼らに奉仕すべきです。

パウロは、異邦人教会がエルサレム教会の人々のために、自発的に献金を捧げたと伝えていますが、同時にそれは、異邦人信徒の義務でもあると言うのです。私たちは、彼らが頂く霊的祝福を共有させてもらっているので、その感謝の応答としてユダヤ人のために具体的な支援をすることが求められています。

イスラエルを祝福するというのは、もちろん彼らのためにとりなすことも重要ですが、経済的な支援も彼らを祝福することにつながります。

そして、異邦人教会がユダヤ人伝道のために多くのささげものをしている事実は、ユダヤ人にねたみを引き起こさせる動機にもなるでしょう。

私たちは、ユダヤ人を迫害するのでもなく、無関心でいるのでもなく、彼らを知り、彼らを祝福することが求められているのです。

4 正しく聖書を学ぶ

「なぜキリスト教会はヘブ林的視点を失ったのか？」というテーマで学んできました。このテーマを選んだ理由は、ヘブ林的視点で聖書を学ぶことが、どれほど重要かをお伝えするためです。

改めて聖書解釈の3大原則を確認しましょう。

①ヘブ林的視点で読む ②字義通りに読む ③文脈で読む

キリスト教会は、歴史の中でこの原則を失ってしまいました。しかし今は、この原則に立ち帰るチャンスが到来している時代です。高坂聖書フォーラムは、この原則に立ち、聖書を正しく解釈し、理解し、伝える群として成長させていただきたいと願っています。



今回のセミナーは、トッド・モアヘッド著／聖書で学ぶ「約束の地」を参考資料にさせていただきました。イスラエルがどのような歩みをして来たか、教会がどのような歩みをしてきたかが、より深く理解できます。次のステップの学びとして、ぜひお求め下さい。

高坂聖書フォーラムでも販売しています。1冊300円。